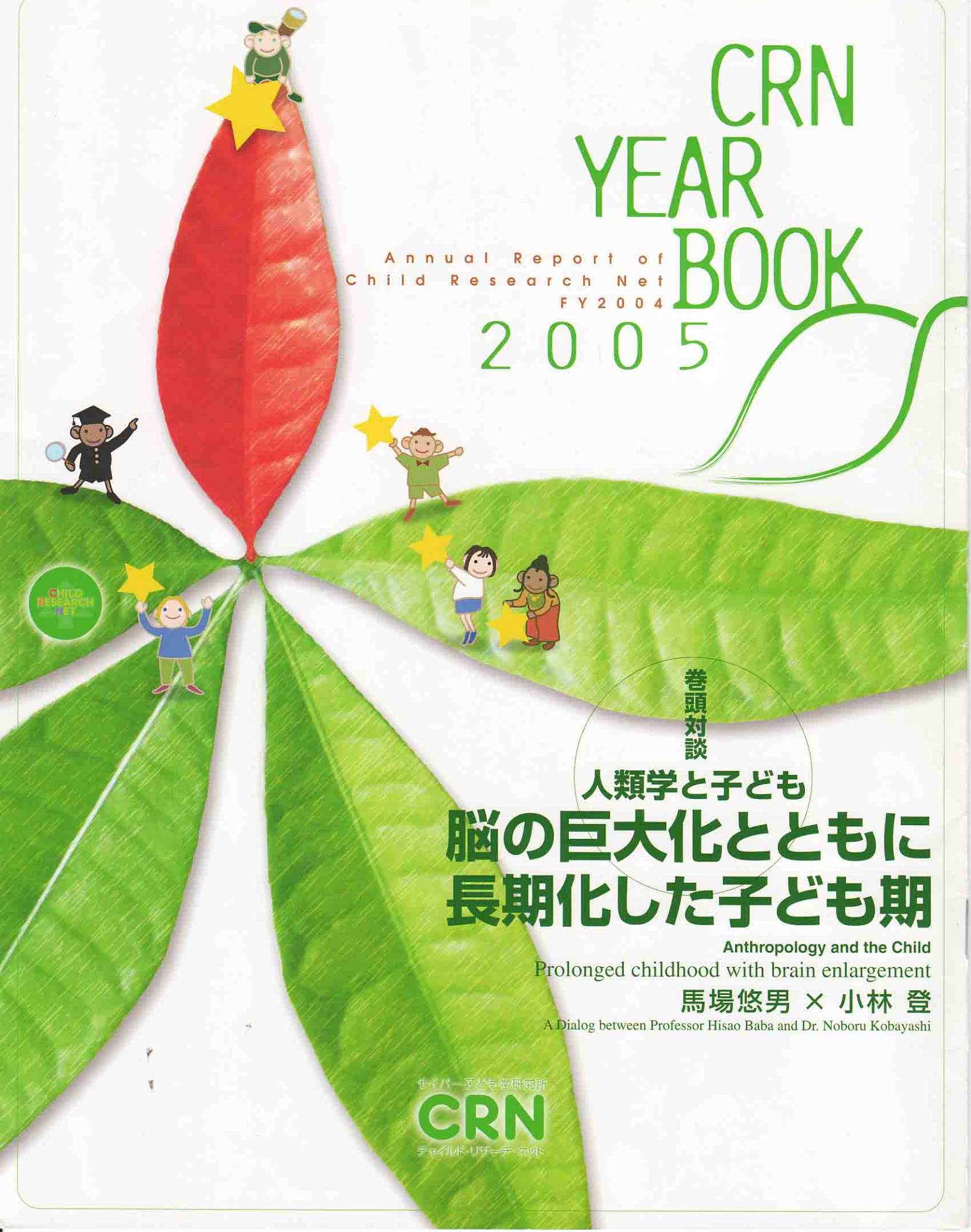


CRN YEAR BOOK

Annual Report of
Child Research Net
FY 2004

2005



巻頭対談

人類学と子ども

脳の巨大化とともに 長期化した子ども期

Anthropology and the Child
Prolonged childhood with brain enlargement

馬場悠男 × 小林 登

A Dialog between Professor Hisao Baba and Dr. Noboru Kobayashi

サイバー子ども学研究所

CRN

チャイルド リサーチ ネット

CRN

人類社会に貢献できる 信頼性の高いウェブコミュニティを

チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)は、ウェブサイトを通じて、子どもたちや子どもに関心のある人々との情報交換や交流活動を行うサイバー研究所です。来年度で誕生から十年目を迎えることになりました。

CRNが活動を始めた一九九六年当時は、パソコンの世帯普及率は一五%、インターネットの世帯普及率は三%に過ぎませんでした。それが、二〇〇三年にはパソコンの世帯普及率は七八%、インターネットの世帯普及率は八八%にまで拡大しています(総務省情報政策局通信利用動向調査)。いまやインターネットは電気やガスと同じように、私たちの生活を支える必要不可欠なインフラのひとつになったと言えます。

CRNもアクセス数を増やすことを目的としていた実験的な時代を終えて、子どもに関する情報拠点として安定した役割を果たすようになってきました。とくに昨年は「日本子ども学会」

「甲南女子大学国際子ども学研究所センター」などの外部の団体との交流を促進し、さらに中国との交流活動も始まり、コンテンツはますます充実しています。ウェブサイトの利用者だけに知られていたCRNも、オフラインの人々も含めた広い範囲にまで影響を及ぼすようになってきました。

あらゆる世代や階層に広がったウェブコミュニティは、徐々に信頼性や倫理性が求められる社会的な存在になってきました。とくに大人だけではなく、子どもたちもふつうに利用する機会が増えてきただけに、未来に向けた夢のある活用の仕方がますます求められます。どんなに小さくても、つねに地球規模に広がりが得る可能性をもったウェブコミュニティを活用して、人類社会にどのような貢献をなしていくのか、子どもを愛する世界の友人たちとともに考えていきたいと思っています。

CRNの活動理念

■ CRNは

子どもに関心をもつさまざまな分野の人々が、既存の学問の枠を超えて、学際的に語り合う対話の場をめざします。

■ CRNは

「子ども学」の考え方に基づき、子どもの生物学的な存在と社会的存在について探究していきます。

■ CRNは

インターネットを通じて、子どもについて研究する世界中の人々と交流をはかり、情報や知恵を交換していきます。

CRN

A Web Community Backed by Knowledge and Reliable Data

Child Research Net (CRN) is a cyber-institute for dialogue, information exchange, and other activities related to children's issues. Next year will mark our tenth anniversary.

When CRN was launched in 1996, only 15% of all Japanese households had computers and 3% were connected to the Internet. By 2003, this had risen to 78% and 88%, respectively. Clearly, the Internet has become as indispensable for our daily lives as electricity and gas.

CRN has come a long way since the early experimental days. Our goal then was to increase the number of website visitors by becoming a well-known source of dependable information on children. Now CRN is growing in content, too, with the inauguration of the Japan Society of Child Science last year and a Chinese-language website and other exchanges in China.

As Web communities grow in diversity, they have to meet high standards of social responsibility, ethics and credibility. Today when regular users include not only adults, but many children, it is all the more necessary to think about how the Internet should be used in the future. We want to do this with our friends all over the world who care about children, too. Web communities have enormous potential and we hope to take advantage of all the possibilities, however small, to make a meaningful contribution.

◇ CRN's Aims ◇

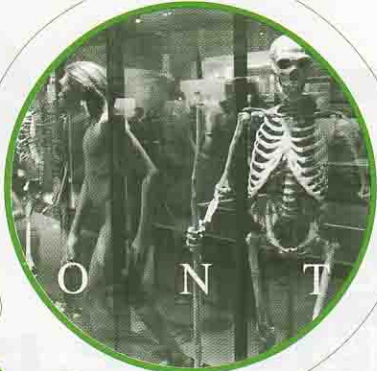
- Bringing together people concerned about children and offering a forum for innovative interdisciplinary discussion
- Pursuing the happiness of children from the biological and social perspectives of *Kodomogaku*, Child Science, in its consideration of children
- Exchanging information and knowledge on the Internet with child experts and researchers worldwide

CRN
YEAR
BOOK

Annual Report of
Child Research Net
FY2004

2005

C O N T E N T S



人類学と子ども

脳の巨大化とともに 長期化した子ども期

Anthropology and the Child: Prolonged childhood with brain enlargement

馬場悠男 × 小林 登

A Dialog between Professor Hisao Baba and Dr. Noboru Kobayashi

ブロードバンド時代の子ども学研究

Child Research in the Broadband Age

Interview



CRNユーザー

CRN Users

子ども学研究 中国語圏への広がり

Child Science Research
Chinese-Language Exchanges

子どもとメディア研究 子どもの現場をフィールドワークする

Research on Children and the Media
Fieldwork on Media Use

Webコミュニティ研究 ① 日本語サイト・広がりのあるコミュニティへ

Web Community Research (1)
Expanding Japanese Website Networks

Webコミュニティ研究 ② 中国語サイトの仲間入り

Web Community Research (2)
New CRN Chinese-Language Website

トピックス 第1回子ども学会議開催「メディア社会と子どもたち」

Topics : The First Annual Conference of the Japanese Society of Child Science

CRN活動の軌跡、2005年度の活動予定

Activities and Research Plans for FY2005



CRN
YEAR
BOOK

Annual Report of
Child Research Net
FY2004

2005



も
じ

2

10

12

14

16

18

20

22

24

人類学と子ども

脳の巨大化とともに 長期化した子ども期

Anthropology and the Child
Prolonged childhood with
brain enlargement

A Dialog between Professor Hisao Baba
and Dr. Noboru Kobayashi



馬場悠男

(国立科学博物館人類研究部部長)

×

小林 登

(CRN所長)

二本足で歩く、道具を使う、脳が大きい、言葉をしゃべる——ヒトは他の動物たちとは違った特徴をたくさんもっています。それらは何百万年にもおよぶ人類進化の過程でもたらされたものです。ヒトの子どもが長期にわたって親の庇護のもとで暮らすのも、進化の過程で起きた適応戦略のひとつかもしれません。子どもの生物としての本質を理解するには、人類学という学問が有力な手がかりを与えてくれます。今回のゲストは国立科学博物館・新館の人類進化コーナーの監修者である馬場悠男さんです。



化石の発見が繰り返されて系統的な人類学が始まった

小林 私は一九七〇年代に東大の教授になって、東大紛争後の医学部を再建するために、世界の大学の医学部を視察して回りました。その頃、欧米の大学ではすでに、生理学、解剖学、生化学などの細分化された学問を統合し、さらに人文科学や社会

科学の成果も交えて、ヒューマン・サイエンスとして人間を学ぶ態勢ができていました。日本の子ども研究の分野でもそのような考え方を確立しようと、私は七〇年代から学際的な「子ども学」の大切さを提言し続けてきました。

馬場先生がご専門とされている人類学という学問も、総合的に人間をとらえる点では共通し

ているようなので、本日は先生に人類学のお話をうかがい、ぜひ子ども学研究に役立てたいと思っています。まず、人類学とはどのような学問なのかを教えてくださいいただけますか。

馬場 細分化された学問を統合化するという面で共通性があるというのは、まさにおっしゃる通りだと思います。人類学というのは、生物の進化の流れの中

Noboru Kobayashi

小林 登(こはやし・のぼる)
CRN所長。子どもの虹情報研修センター長。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。一九二七年東京生まれ。一九五四年東京大学医学部卒業。医学博士。著書は小児科学の専門書の他に、「ヒューマン・サイエンス」(中山書店)、「子どもは未来である」(メデイサイエンス社)、「育つ育てるふれあいの子育て」(風潮社)など。

脳の巨大化とともに 長期化した子ども期

Anthropology and the Child: Prolonged childhood with brain enlargement
A Dialog between Professor Hisao Baba and Dr. Noboru Kobayashi

Bipedalism, the use of tools, large brain size, and language — these are some of the various characteristics that distinguish humans from other animals. They evolved in the course of human evolution over millions of years. The prolonged period of infancy under parental care may be an adaptation strategy that originated in the process of human evolution. Research in anthropology gives an important clue to understanding the nature of the child as an organism.

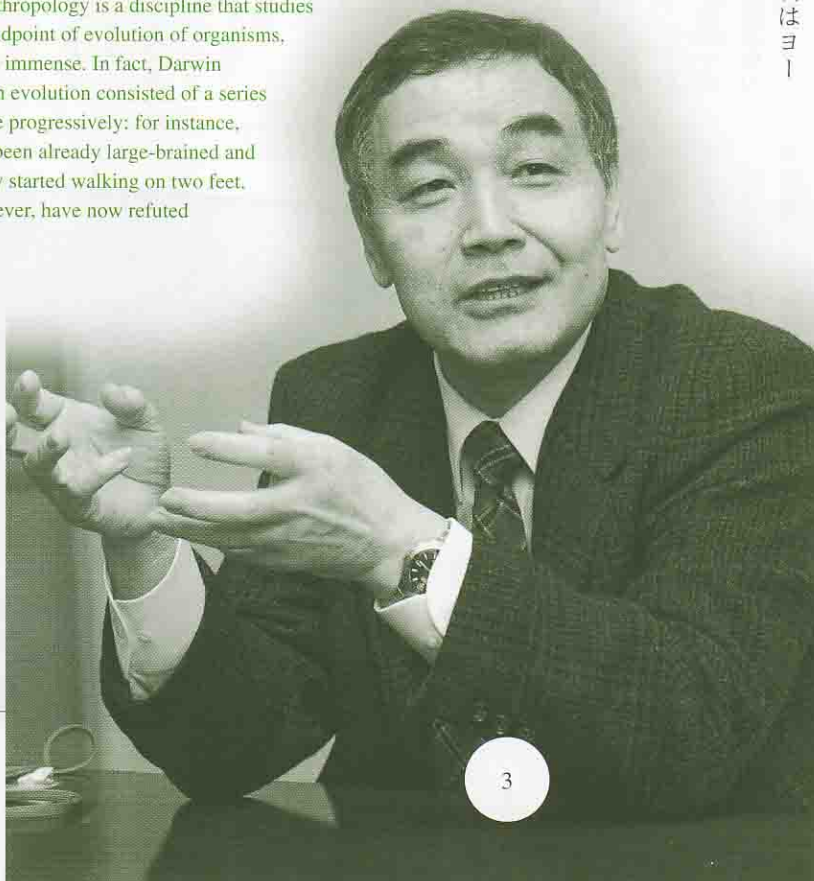
All the dramas of human evolution took place in Africa

Kobayashi: When I visited major university medical schools to study the education system worldwide in the beginning of the 70's, I witnessed that universities in Europe and the United States were already moving toward unifying academic fields that were differentiated as physiology, anatomy, biochemistry and the like, and toward studying humans under the rubric of the human sciences encompassing all knowledge from the humanities and social sciences. Wishing to establish a similar concept in research related to children in Japan, I have, since the 70's, been consistently advocating the importance of a multidisciplinary "Child Science." I have a feeling that your field of research, anthropology, and mine share something in common, for both of us strive to study humans through a comprehensive approach. I'm sure that your insights are relevant to Child Science.

Baba: You are quite right in pointing out our common efforts to bring together subdivided academic disciplines. Anthropology can be interpreted as a comprehensive approach to understanding humans in the evolutionary process of organisms. In particular, thanks to the rapid progress achieved in recent years in functional anatomy, molecular genetics and dating methods, among others, we can now consider the question of human evolution with a more comprehensive and empirical approach.

Kobayashi: I understand that there were as many as 20 human species in the past, including us *Homo sapiens*. Progress in comparative research must have also contributed to discerning various differences within the species. But would you explain how humans have evolved?

Baba: Given that anthropology is a discipline that studies humans from the standpoint of evolution of organisms, Darwin's influence is immense. In fact, Darwin postulated that human evolution consisted of a series of events taking place progressively: for instance, humans would have been already large-brained and using tools when they started walking on two feet. Paleontologists, however, have now refuted Darwin's hypothesis.



Hisao Baba

馬場悠男（はば・ひさお）
国立科学博物館人類研究部部長。一九四五年東京生まれ。六八年東京大学理学部生物学科卒業。獨協医科大学解剖学助教授を経て、八八年国立科学博物館主任研究官に。九六年から現職。東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻教授を併任。専門は人類形態進化学で、インドネシアのジャワ原人の発掘調査を二〇年近く行っている。編著書は、「ホモ・サピエンスはどこからきたか」（河出書房新社）、「顔を科学する」（ニートンプレス）など。

で人類を総合的にとらえる学問だと考えていただければいいのではないのでしょうか。とくに、現代では、機能解剖学、分子遺伝学、年代推定法などが飛躍的に進歩しましたので、そのような成果を活かしながら、総合的かつ実証的に人類進化について考えていけるようになりまし

た。
小林 昔の人類学と今の人類学の大きな違いは何なのですか。
馬場 昔は化石の発見量が少なく、時代的にも地域的にも限られていました。ですから、断片的な解釈をするだけで、人類の進化の系列の中で化石の意味を考えることはできなかったのです。しかし、化石がたくさん見つかる、形態の比較などによって進化の道筋がたどりやすくなり、系統的なものの考え方

ができるようになりました。人類学の歴史そのものは古いのですが、そのように変わったのは第二次大戦後のことで、自然科学の分野として考えると、人類学は新しい学問だとも言えます。
とくに、最近のDNA分析の技術によっても、人類学は大きく変わりました。例えば、ネアンデルタール人の化石はヨー



ロップで発見されたので、ヨーロッパ人の祖先と言われた時期があるのですが、現在では、化石から抽出したDNAの分析の結果、ヨーロッパ人とはまったく一致しないことがわかっています。科学的に系統を証明することができるようになりました。

小林 発見される化石の量が増えてきたし、分析の手法も進歩してきたですね。人類化石を見つけるのは難しそうですが、ここに化石がありそうかどうかというのは、どうやって予測するんですか。

馬場 それは同じ時代の、すでに絶滅した動物の化石が発見されたりすることで推測されます。化石が地表面に露出するには、地層が隆起してから浸食される必要があります。地殻変動で地層が過去に大きく隆起し、その後に河川などにより浸食された場所で見つかりやすいですね。また、骨のカルシウムがうまく保存されるには、土壌がアルカリ性でないといけません。

人類進化のイベントはすべてアフリカで起こった

小林 先日、馬場先生が監修されたNHKの番組を拝見しましたが、人類は我々ホモ・サピエンスも含めて、過去に二〇種もいたそうですね。比較研究が緻密になって、さまざまな差異が見えてきたのでしょうか、人類進化はどんなプロセスをたどってきたのですか。

馬場 人類学は、人類を生物進化という観点から研究する学問ですから、ダーウィンの影響は絶大です。実は、ダーウィンは、人類が二足歩行をし始めたときには、すでに脳は大きくなっていて、道具も使用していた、というように人類進化をセットで考えていました。しかし、実際に化石を調べていくと、そうではないことがわかってきました。

一八九一年、オランダのウジェーヌ・デュボアという人類学者が、インドネシアでジャワ原人の化石を発見しました。ジャワ原人は現代人と同じように直立していましたが、脳容積はチンパンジーと現代人の中間の九〇〇ccぐらいしかなく、サルとヒトとのミッシング・リンク（失われた環）を埋める世紀の大発見と言われました。また、

一九二四年に発見されたアウストラロピテクスも直立していましたが、脳容量はチンパンジー並の三五〇ccで、ヒトの祖先なのか、類人猿の変種なのかが論争になりました。

このような化石が発見されても、すぐにはダーウィンの考え方は否定されなかったのですが、さらに同じような化石がアフリカやアジアでたくさん見つかり、徐々に人類進化をセットで考えることはできなくなりました。

人類はまずは二足歩行をし、立ち上がったチンパンジーのような状態が四〇〇万年近くも続きました。それから、道具の使用や肉食などの影響で脳が大きくなります。さらに、何十万年あるいは百万年もかけて、言語の発達へと向かいます。たくさん人類化石の発見でわかったのは、人類はいくつかの進化の過程を経て、長い年月をかけて人間らしくなっていたということです。

小林 猿人もそうですが、原人や新人の起源もアフリカですよね。

馬場 不思議なことに、人類進化の主要なイベントはすべてアフリカで起きているんです。

小林 なぜなのでしょう。

馬場 偶然も半分はあったと思



脳の巨大化とともに 長期化した子ども期

Anthropology and the Child: Prolonged childhood with brain enlargement
A Dialog between Professor Hisao Baba and Dr. Noboru Kobayashi

In 1891, the Dutch anthropologist Eugene Dubois discovered fossils of the Java man. The Java man stood upright like modern humans, but his brain capacity was 900 cc, between that of a chimp and a modern human. That was why the Java man was sensationalized as the greatest discovery of the century that was to be the “missing link” between apes and the genus *Homo*. Likewise, the *Australopithecus*, discovered in 1924, stood erect, but his brain capacity of 350 cc, comparable to that of a chimp, led to a dispute over whether it was just a variation of the anthropoid or the ancestor of the genus *Homo*.

Those fossils discoveries, admittedly, did not entail the immediate rejection of Darwin's idea. But eventually, as more fossils of the same kind were discovered in Africa and Asia, fewer scholars supported Darwin's view of human evolution as a single set of progressive processes.

The fact is that human species became bipedal, and this phase as an upright chimp, so to speak, lasted nearly 4 million years. It was only afterwards that the brain grew larger as a result of tool manipulation and meat eating. Subsequently, it took another hundreds of thousand years or even one million years for human species to develop language ability. So you see, humans have come to be human-like over a long, long period of time, traversing several stages of evolution.

Kobayashi: Not only *Australopith*, but also *Homo erectus*, or even *Homo sapiens* originated in Africa. Why?

Baba: Strangely enough, all the major events in the history of human evolution took place in Africa. This may be attributed to sheer coincidence, say by 50%. But definitely, the biggest factor lay in human adaptability to climatic fluctuations. Africa has experienced three long cycles of drought, and each one may have given rise to a new genus *Homo* that was more adaptable to dry climates. Thus *Australopith* evolved 7 million years ago; *Homo erectus*, 2 million years ago; and, finally, *Homo sapiens*, 150,000 years ago.

Kobayashi: That means evolution did not take place through successive transitions, but sporadically, in a sudden leap, so to speak.

Baba: That's right. You may say, each major climatic fluctuation brought a new adaptation. As for bipedalism, the former hypothesis that early human species were forced to stand upright when the climatic change drove them out of forests to open grasslands has been refuted today by the fossil evidence that they already practiced the bipedal gait to some extent when they inhabited forests.

One basis for postulating their bipedalism in forests is that fossils of early *Australopiths* have been discovered together with fossils of animals that inhabited forests. Moreover, early *Australopiths* are known to have had teeth with a thinner enamel layer. You know, the *Australopiths* that eventually inhabited grasslands ate tough food such as rootstocks and peas had teeth with a thicker enamel layer than that of a chimp's teeth. This trait has been passed down to us modern humans. The fact that early *Australopiths* had teeth with a thin enamel layer would indicate that their diet consisted of soft fruits, leaves and the pith of trees.

行われるということでしょうか。ただ、二足歩行に関しては、気候の変動によって森から平原に出て、止むを得ず立ち上

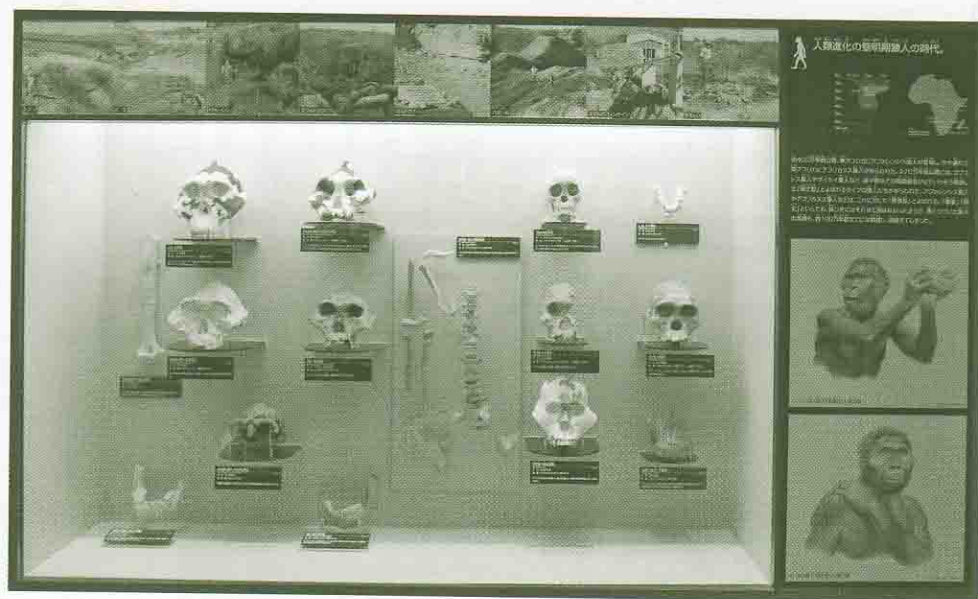
がったと言われているのですが、現在では、森で生活していた時代からある程度は二足歩行していたことがわかっています。
小林 木の上を渡り歩きながら、二足歩行を覚えたということですか。
馬場 我々の祖先のモデルとして、ビッグミートンパンジー（ボノボ）が解剖学的に大変近いと

言われています。彼らは子どもを背負って、さらに食べ物を抱えて、二本足でひよこひよこ歩きますが、最初はあのような二足歩行をやっていたのではないのでしょうか。森の中で立つて歩いていったという根拠は、ひとつには初期の猿人の化石が森の動物の化石と一緒に発見されているということがあります。また、初期の猿人では歯のエナメル

質が薄いことからわかります。後に草原で暮らすようになった猿人は、根茎や豆など硬いものを食べていたようで、歯のエナメル質はチンパンジーよりも厚いんです。その特徴は我々現代人にまで受け継がれています。それが薄かったということは、森の柔らかな果物や葉っぱや木の髄を食べていたと考えられるのです。



複数の人類が同時期に地球の上に存在した



小林 人類はアフリカで発生して、地球全土に広がっていきますね。私は、その理由は人間としての好奇心の強さにあるのではないかと思います。赤ちゃんは生まれると、大きな産声を上げて泣きますが、それがおさまると、周りの様子を眺め回しま

す。人間というのは生まれながらにして、インフォメーション・シーカー（情報の探索者）なのではないでしょうか。気候の変動によって広がったというよりも、例えば、太陽の昇る方角には何かがあるのだらう、山の向こうにはもつとうまいものがありそうだ、といった好奇心により広がっていったとは考えられませんか。

馬場 太陽が強い影響を与えたことは予想されますが、特定の方角に移動した形跡がないので、人類学者としては肯定も否定もしたいですね。まず、二足歩行によって移動が楽になったことは言えるでしょうね。それから、人間は汗をかきますけど、これが冷却装置となつて長い距離を移動するときには有利に働きます。また、人間は裸でも、皮下脂肪をためこむことで、けっこう寒さをしのぎます。つまり、人類は他の動物に比べ、体温コントロールが巧みで、そのような環境への適応力が、人間の行動範囲を広げていく要因となつたのではないのでしょうか。

ただ、うまいものを探していたということでは、ホモ・サピエンスが魚を捕る技術を開発して、海産物を求めて海岸沿いに移動したということはあるようです。そのような遺跡がアフリカでも見つかっています。

小林 日本人はそういうホモ・サピエンスの子孫なのでしょいかね（笑）。私たちが考える以上に、昔のヒトはあっちこっちに動き回っていたんですね。

馬場 一〇年ほど前までは、アフリカで進化した原人が世界に広がって、各地域でホモ・サピエンスに進化したと考えられて



国立科学博物館・新館

2004年11月に国立科学博物館の新館が全面オープンしました。テーマは「地球生命史と人類——自然との共存をめざして」。40億年前に生命が誕生し、変動する地球環境に適応しながら、多様な生物が進化していきました。その壮大な生命の営みを、できる限り実物の標本資料を体系的に配置することで、ダイナミックにとらえられるよう工夫されています。人類の進化のコーナーでは、恐竜の絶滅後に大発展した哺乳類の中から人類が生まれ、世界中に広がっていった様子をたどることができます。



所在地：東京都台東区上野公園7-20

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

休館日：毎週月曜日（日・月曜日が祝日の場合は火曜日）

入館料：一般・大学生420円 小・中・高校生70円

お問い合わせ：月～金曜日 03-3822-0111／土・日・祝日 03-3822-0114

<http://www.kahaku.go.jp>

脳の巨大化とともに 長期化した子ども期

Anthropology and the Child: Prolonged childhood with brain enlargement
A Dialog between Professor Hisao Baba and Dr. Noboru Kobayashi

Co-existence of multiple human species

Kobayashi: As I understand, human species that evolved in Africa eventually migrated all over the earth. The reason for that migration lay, in my opinion, in the strong sense of curiosity innate to human species. For instance, when a baby is born, it gives out a loud birth cry. But hardly has the cry subsided before the baby starts looking around its environment. Don't you think that humans are born information seekers? Couldn't you say that perhaps humans might have migrated, driven by sheer curiosity, rather than by climatic fluctuations, to find out what was going on where the sun rose?

Baba: Well, your sunrise theory intrigues me, but I'm afraid that humans migrated not only to the east, but also to the west. First, bipedalism facilitated locomotion. Second, perspiration innate to humans dissipated heat like a cooling system to facilitate locomotion over a long distance. Finally, though humans are naked, they can withstand cold fairly well by storing subcutaneous fat. In other words, humans are better equipped to control body temperature than other animals. Such environmental adaptability was possibly a factor that helped humans extend their scope of activities.

Kobayashi: So early *Homo* moved around far more extensively than we assume.

Baba: Until about 10 years ago, it was believed that *Homo erectus* originating in Africa migrated all over the world and eventually evolved into *Homo sapiens* in each region they went to. Today, such a hypothesis is nearly extinct. The fact is, not only Australopiths, but also *Homo erectus*, archaic *Homo sapiens* or Neanderthals as well as late *Homo sapiens*, all originated in Africa, and each of them individually spread worldwide. As it took them several thousands of years to migrate, by the time they finally reached the land's periphery, a new human species might have arisen in Africa, replacing the old ones.

Premature birth and prolonged infancy characterize childhood of genus *Homo*

Kobayashi: Do any anthropologists research children?

Baba: Not many, I'm afraid. The study of anthropology relies on fossils, but infant fossils are rare to find. Nevertheless, there is an interesting finding from research on infant fossils of Neanderthals. The Neanderthal had a different pattern of growth from that of modern humans. Namely, the bones of legs and hands of a 2 year-old Neanderthal infant are as thick as those of a *Homo sapiens* infant of 4 years. As their bones are not so different from each other in length, we assume that the Neanderthal infant was much more robust than the *Homo sapiens* infant. Perhaps by growing fat at an earlier age, Neanderthal infants could subsist in the coldest climate of the glacial epoch. Judging from its unworn teeth, we know also that the Neanderthal infant was not weaned yet at the age of 2 and half years.

いたのですが、今はそのような説は絶滅しかかっています。アフリカで、猿人だけでなく、原人も旧人も新人も誕生して、それぞれ世界に広がっていったということですね。何万年もかけて広がりますから、周縁の地にとどり着いた頃には、アフリカではすでに新たな人類が生まれていて、古いものは淘汰されているということも起きたよう

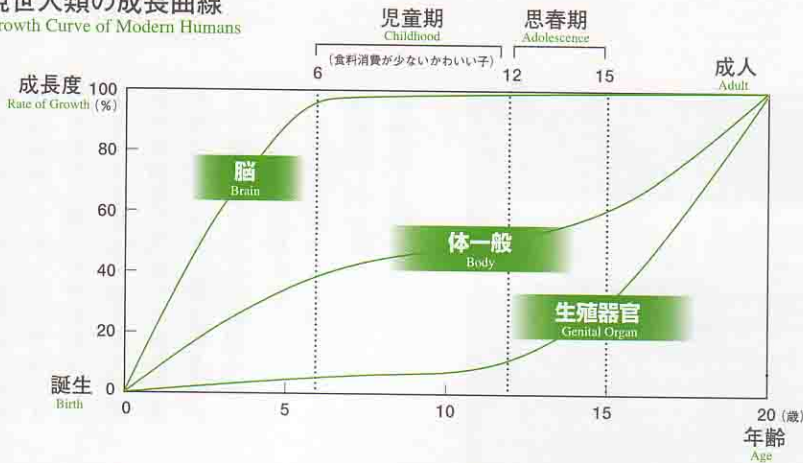
です。
小林 同じ地球上に、複数の人類が同時期に存在することがあるのは、そのためですね。
馬場 特殊な例としては、昨年末に科学雑誌「ネイチャー」に論文が載りましたが、インドネシアのフローレス島で一万二千年前までジャワ原人の子孫が残っていたということです。一万二千年前というと、すでにホ

モ・サビエンスが世界中に広がっている時期で、原人や旧人はとくに滅んでいました。どうやら数十万年前にジャワ原人が何らかの手段で海を渡って、孤立した島で特殊化して、身長わずか一メートル、脳容量も三八〇ccぐらいに小さくなって、そのまま生き残ったようです。動物ではときどきそのようなことが起きますが、ヒトの場合

も、たまたま周囲から隔離されていますと、古いタイプの人類が生き残るということもあるようです。



現世人類の成長曲線 Growth Curve of Modern Humans



ヒトの子どもの特徴は 早産と児童期の長さ

小林 子どもについて研究している人類学者はいませんか。

馬場 たとえばネアンデルタール人の子どもについて研究している人はいますが、多くはないですね。人類学は化石がないと話になりませんが、子どもの化石は見つかるのが稀なのです。
小林 子どもの骨は残りにくいでしょうね。石灰化が十分では

ないですからね。

馬場 まさにおっしゃる通りです。でも、ネアンデルタール人の子どもの化石からはおもしろいことがわかってるんですよ。ネアンデルタール人は、我々現代人とは成長のパターンが違っているんです。たった二歳でも、手足の骨の太さはホモ・サピエンスの四歳ぐらいの子どもと同じなんです。長さはあまり変わらないので、がっちりした子どもだったことがわかります。たぶん、早く太ることで厳寒の氷期でも暮らしていけるようになったのでしょう。歯は磨り減っていないので、二歳半はでも離乳はしていなかったこともわかっています。

小林 現代の人類の成長パターンは、どのように形成されたのでしょうか。

馬場 人類の脳は進化とともにどんどん大きくなっていきました。そのことが人類の成長パターンを決定づける要因になっていると思います。動物ですとふつうは胎児の間に急激に脳が大きくなって、生まれた後に緩慢になるのですが、ヒトの場合は生まれた後にも、脳の急激な成長が一歳ぐらいまで続きます。つまり、動物の一般的な基準から予測される妊娠期間よりも、ヒトの場合は一年ぐらい早

産だということがわかります。大きな頭をもつ子どもを産むために骨盤は広がりましたが、それでも頭が一定以上大きくなると骨盤口を通るのが難しくなるので、脳が大きくなりすぎる前に産むという選択がなされたのだらうと思います。

それから、ヒトの子どもで特徴的なのは、児童期が大変長いことです。六歳ぐらいで脳は大人並になるのに、体は大人の三分の二ぐらいの大きさのままでずっと留まっています。思春期のスパークが始まるまで、成長が押さえられている。これはホモ・サピエンスの適応戦略なのだろうと思います。

児童期は学習が非常にスムーズに進む時期です。この時期には、学習に特化した生活をさせておいた方が効率的です。体の成長が抑制されていれば、食料の消費量も少ないですし、教育もやりやすい。他の動物に比べて大変手間のかかる戦略ですが、ヒトにとっては都合が良かったのだと思います。ホモ・サピエンスの成長パターンがそうなのですから、小学生や中学生に勉強をさせるのは、大変理にかなっているんです(笑)。

小林 これからは人類学の知見も参考にしながら、子育てにつ

いて考えていくべきですね。

馬場 古代人の子育ては、原点として参考になると思います。発達心理学や教育学ともつなげた議論ができると思いますね。たとえば、チンパンジーの子どもは、初めは母親にびったりくっついていて、離すことはできません。アメリカなどでは小さいうちから自立心を育てるためにひとりで寝かせるとか言いますけど、私に言わせれば論外ですね。霊長類の子育てから言くと、添い寝するぐらいでちょうどいいと思います。

小林 まったく同感ですね。

馬場 ヒトだって、サル的一种ですからね。そのようなことを総合的に考えていけば、子育て環境も改善していくと思います。私はいま自分の孫を見て、改めて子どもについていろいろ発見をしているところです。子どもとは毎日一緒に生活しますから、なかなか変化に気づきませんが、孫はたまにしか会わないので、成長の変化に気づきやすいですね。

小林 これからはぜひ、人類学の観点から子育てのあり方についてご提言いただきたいと思います。今日はいろいろありがとうございました。

馬場 こちらこそ、ありがとうございました。

脳の巨大化とともに 長期化した子ども期

Anthropology and the Child: Prolonged childhood with brain enlargement
A Dialog between Professor Hisao Baba and Dr. Noboru Kobayashi

Kobayashi: How was the development pattern of modern humans formed?

Baba: The human brain increasingly grew larger in the course of evolution. This played a decisive role, I think, in determining the pattern of human development. Usually, the brain of an animal grows rapidly during the prenatal period, but this growth slows down after birth. With a human child, rapid growth of the brain continues after birth till the age of one year or so. That would mean that a human baby is born prematurely by one year or so, when compared with other animals. True, the pelvis of a human female has broadened to facilitate the birth of a large-headed baby, but there is a limit beyond which it is difficult for the baby to pass through the birth canal. That is why, I guess, humans have chosen to give birth to a child prematurely before its brain gets too big.

One more thing: one of the characteristics of the human child is a very long duration of childhood. Though the brain of a six-year-old child is already comparable to that of an adult, the size of its body remains two-thirds the adult's size. The physical growth is contained until the child enters adolescence, due to the adaptation strategy of *Homo sapiens*, I guess.

Childhood falls in the period during which learning progresses quite smoothly. It is therefore more efficient to keep the child at a life stage geared for learning. For as long as its physical development is suppressed, its consumption of food is kept minimal, and education is facilitated. Though this adaptation strategy of humans, in comparison with other animals, sounds very tedious, but it must have been quite appropriate for *Homo sapiens*. Given that this is the development pattern of *Homo sapiens*, it fits perfectly with our reasoning that school kids should study in compulsory education. (laughter)

Kobayashi: So the time has come for us to think about how to rear children in the light of the latest knowledge in anthropology.

Baba: It may be quite useful to go back to child rearing by early humans. It would certainly be exciting to involve experts in development psychology and pedagogy in our discussion. For example, a chimp's infant at an early age clings tightly to the mother and is inseparable from her. Thus the child rearing of primate species tells us that it is totally appropriate for the mother to sleep with the child, though in the United States, it is said that a child should be accustomed to sleeping alone from an early stage of life to foster its sense of independence. Don't forget that *Homo sapiens* belong to the ape family. If such a comprehensive perspective were adopted, it would certainly improve the child rearing environment.

Kobayashi: I definitely agree with you! So we will count on your contribution from the anthropologist's point of view to further discussions on child rearing. Well, thank you so much for the stimulating dialog today.

Hisao Baba, D.M.Sc.

Born in Tokyo in 1945.

Curator and Chair, Department of Anthropology, National Science Museum

Professor, Department of Biological Sciences, The University of Tokyo.

Graduated from the Department of Biological Sciences, The University of Tokyo.

Formerly, Associate Professor, Dokkyo University School of Medicine. Specializes in morphological anthropology and has conducted paleoanthropological research and excavations of Java man for 20 years.

Noboru Kobayashi, M.D.

Born in Tokyo in 1927.

Pediatrician

Director, Child Research Net (CRN)

Director, Children's Rainbow Center (Japan Information and Training Center for

Problems related to Child Abuse and Adolescent's Turmoil)

Professor Emeritus, The University of Tokyo

President Emeritus, National Children's Hospital

Doctor of Medicine, Faculty of Medicine, The University of Tokyo



photograph: 青木 司/TSUKASA AOKI



信頼感のある 情報リソースに

CRNは、インターネットを使って、子どもに関心をもつさまざまな人々をつなぐ、バーチャル研究所です。ワークショップやイベントを開催したり、独自の研究調査などとともに、サイトを通じての情報提供を行い、子どもに関する情報リソー

スとして、ユーザーの方々の信頼を集めています。

CRN発足時は、アクセス数の増加を目標としていましたが、会員制を導入した二〇〇三年のリニューアル以来、子どもへの関心が高いコア層への訴求を心がけてきました。最新の子ども学研究の成果や海外の研究論文の翻訳、アンケート調査のデータ、学術集会やシンポ

ジウムなどの情報を意識的に集めることで、リピーターとなるユーザーの方々を着実に増やしていきました。

また、CRNサイトは専門的な情報を提供するとともに、一般的な子育て情報なども発信しています。ユーザーの方々は、専門的な情報を入手するだけではなく、母親たちのアンケートの意見に共感したり、子どもたちとのネット上での会話を楽しんだりなど、サイトをさまざまな用途で活用しています。

子ども学を 創造的に発展させる

エンスの考え方を核にすることで共通言語が得やすくなり、学際的な対話のネットワークが広がるようになりました。

CRNが共催した本年度の第1回子ども学会議では「子ども学エッセイ」を募集しましたが、子どもの謎に関するユニークな論考が数多く集まりました。世界中の子どもが鬼ごっこをするのはどうしてだろうか。子どもはどうしてウンチやオシッコの話が好きなのだろうか。子どもはどうして頻繁に泣くのだろうか。そんな多彩なテーマのエッセイが、子どもの研究者だけではなく、ニホンザルの研究者や建築デザイナーなどの異分野の方々からも寄せられました。子ども学は、科学的な実証性だけではなく、あるがままの子どもに向き合っていて、子どもの謎を再発見していく創造的な学問でもあります。

デジタルメディアで 新しい地平を拓く

現在、私たちはCRN開設時にはなかった、大容量の映像を瞬時に送りあうような、新しいメディア環境を手に入れています。これからは、これらの技術を有効活用して、これまで

CRN ブロードバンド時代の 子ども学研究

「子ども学」というコンセプトは、異なる立場の人々を対話の場に導いていく力があります。2004年度のCRNの活動は、学問の領域や職業の違いを超えて、多彩な人々をネットワークに巻き込み、さらに国境を越えて、アジアの研究者たちとの人的交流をスタートさせました。CRNは、異なる考え方をもちた人々との対話の中から「子どもの未来、をつくっていくことで、インターネット時代の「希望の原理」を生み出していきたいと願っています。





Trustworthy Resources

CRN is a cyber-research institute that uses the Internet to bring together people with an interest in children. Our workshops and events, original research, and the vast information resources available to users on our website are renowned for their reliability and valuable insights. When CRN was first launched, our goal was increasing the number of website visitors, but in recent years, we have focused on building a network of people who are interested in and care about children. We will continue to offer the latest research findings, academic papers in translation, conference papers and other information that will appeal to both first-time and repeat visitors.

CRN's resources on children and childrearing subjects cater to the needs and interests of both the specialist and general user. Users can also access the results of surveys of mothers, enjoy conversations with children and a whole range of stimulating exchange.

Creatively Developing Child Science

Child Science is CRN's key concept. In the life of human beings, childhood is a time of mysteries that the human sciences in recent years have been working to clarify. Child Science has advanced through new breakthroughs in neurology, genetics, language acquisition, memory formation, the function of sleep and other areas. Centered around the biological perspective of the human sciences, a shared language has become possible. The result is an expanding Child Science network that fosters academic dialogue across disciplines.

When the First Annual Conference of Child Science solicited essays on Child Science, we received a number of fascinating papers offering unique perspectives on the mysteries of childhood: Why do children around the world play hide-and-seek? Why do children love to talk about urination and bowel movements? The contributions came from a wide diversity of authors, from researchers in child-related fields to architects and primatologists. Child Science is a creative discipline that rediscovers the mysteries of children through scientific verification as well as hands-on observation and interaction with children in everyday life.

At New Horizons in Digital Media

Compared with CRN's beginnings, the media environment has changed so vastly. It is commonplace today to receive and send large volumes of image data instantaneously, for instance. An important aim for us is to use this technology in the most efficient and effective possible to pursue new possibilities in child-related research on the Internet. One such effort is the Chinese-language website that seeks to generate discussion with researchers in China and those working in the Chinese language. Child research on the Internet and promoting Japanese-Chinese exchanges are two new areas where CRN's long experience as a cyber research institute will come into play.

Focusing on "Child Science" and the "Internet," CRN will build its organization and activities around these two key concepts in the future. We hope to pursue research on children that is relevant to the twenty-first century and share this process and its fruits with people around the world.



にはできなかった「インターネット」を利用した新しい子ども研究」の可能性を模索していきたく考えています。また、本年度、CRNは中国の研究者たちとの交流を進めるためにサイトに中国語版を加え、国境を越えた情報交流を可能にしました。インターネットを利用した子ども研究や日中の交流事業は、CRNのバーチャル研究所としての経験と蓄積が活

かされる新たな領域と言えます。これからのCRNは、「子ども学」と「インターネット」というふたつのキーワードを立体的に組み立てて、二十一世紀にふさわしい学際的な子ども研究のあり方を本格的に追求し、そのプロセスを人類の財産として諸外国の皆さんと共有していきたいと考えています。



生物学的な情報があるのが、
他の教育サイトと違っておもしろい。



宮崎美智子 (みやざき・みちこ)

東京大学大学院総合文化研究科 博士課程3年

CRNのメールマガジンに登録していますので、記事の配信があると、ホームページを覗きます。CRNは他の教育サイトと違って、生物学的な話がいろいろ出てきますよね。特に「小林登文庫」は楽しみにしています。例えば「母乳哺育のすすめ オっぱイは自然のおくりもの」は興味深く読みました。実は、近々2人目を出産予定なので、個人的にも母子相互作用には関心があるんです。乳幼児の研究というと、赤ちゃんあるいは母親からの一方的な影響を論じるものが多いですが、赤ちゃんとともに変化する母親、その変化に応じた赤ちゃんの変化といった関係性についても、もっと言及されていていいと思います。

現在、私は乳幼児の認知発達を専門としていて、乳幼児の自己映像の認知をテーマに博士論文の執筆に取り組んでいます。生物学的、進化学的な見方にはとても興味があるので、そのような分野の情報をぜひ取り上げてください。例えば、京都大学の霊長類研究所のチンパンジーのアイちゃんやアユムくんのことなどは、もっと詳しく知りたいですね。

研究者としてではなく、母親として気になるのは、子どもたちの生活についてです。睡眠や食事についての情報があると自然に目が向きます。コンビニ型の食事とか、夜更かし生活とか、やはり気になるのでCRNの調査データは参考にしています。研究者としての関心だけではなく、母親としての関心も満たしてくれる話題があるので、CRNはいつも楽しみにしています。

Michiko Miyazaki

Ph.D. candidate, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

Unique educational website with information on biology

CRN's articles on biology make it different from any other educational website. I subscribe to CRN's e-mail magazine and check the website regularly. I find articles that interest me both as a mother and a researcher in baby science. Now expecting my second child, I have a personal interest in mother-child interaction and recently enjoyed reading about the advantages of breastfeeding. Much research on infants tends to be one-sided, that is, it focuses on either the child or the influence of the mother, so I'd like to read more about how both mother and child change through mutual interaction.

I am now writing a dissertation on self-image recognition in infants. CRN is always full of interesting articles and I look forward to more information on children and child development from a biological and evolutionary perspective that responds to my interests as a mother and scientist.

CRNユーザー

CRNをどのように利用していますか？

CRNにはどんなユーザーがいて、どんな目的でアクセスしているのだろうか、ふと思ったことはありませんか。ネット上では同じサイトを眺めていても、ネットの向こう側にいる何万という人々の素顔は想像することしかできません。サイトを運営している私たちスタッフだって事情はまったく同じです。だから、こうして1年間に1度だけ、CRNユーザーの生の声を掲載することにしたのです。

Who are CRN's users? Why do they access the CRN website? With tens of thousands of people logging on to the same website, have you ever wondered who makes up the network? We certainly want to know that. This is what some of our users told us.



調査研究の予備知識は CRNサイトから得ました

フランス・オルステッド・アンデルセン

デンマーク教育大学研究員



私は南デンマークの Fyn 大学で助教授として働いていますが、現在はデンマーク教育大学で「スカンジナビア諸国と日本の小学校における最適な学習環境」に関する国際調査プロジェクトに参加しています。3年間の予定です。

最適な学習環境について考える時、スカンジナビア諸国と日本に特に注目する理由は、PISA (OECDによる国際的な学習到達度調査)において、それらの国の生徒が特に優秀な成績を収めたためで、それぞれの国のよい要素を組み合わせれば「最適な学習環境」が得られるのではないのでしょうか。

CRNサイトは、日本の子ども研究や子育て、教育についてのより広い見識とより深い知識を得るために利用しています。例えば「Cybrary」、「Key Issues」、「Let's Talk」など、多くの、種類が異なるコンテンツを閲覧しました。

これまで日本の文化に関する知識はほとんどありませんでしたが、今回の調査プロジェクトでの準備と実施に必要なバックグラウンドをCRNから得ることができました。大学の同僚にもCRNサイトを勧めたところ、彼らも大変興味を持ってくれましたよ

Frans Ørsted Andersen

Researcher, DPU, Danish University of Education

Expanding my knowledge for child research

I'm a Danish Associate Professor, employed by the University College Fyn (www.cvufyn.dk) in southern Denmark, but for a 3-year period working at the Danish University of Education (www.dpu.dk) with an international research project about "optimal learning environments at primary schools in Scandinavia and Japan".

There are many reasons to put emphasis especially on Scandinavia (Norway, Sweden, Denmark and Finland) and Japan when talking about "optimal learning environments" at school. One such reason is that the so-called PISA-studies (Programme for International Student Assessment) showed some remarkable results for Japan and Scandinavia. Japanese students were among the best in the world when measuring science and math competencies while Danish students top the list when looking at "well being", "motivation" and "cooperation". Finland was No. 1 when looking at "reading". So if you combine elements from Scandinavia with elements from Japan you kind of get the "optimal".

I have used the CRN Website intensely to get a broader view of and deeper knowledge about child research, upbringing and education in Japan. I have been looking at many different parts of the CRN website - e.g. the "Cybrary", "Key Issues" and "Let's Talk".

I had only little prior knowledge of Japanese culture before finding out about CRN, which has been an extremely helpful and easy way to get the background insight I need to prepare and conduct the research I'm involved in. I have recommended CRN to some of my colleagues at my own university - they are now also using the website with great interest.

翻訳の勉強も兼ねて、 英語版にアクセスしています。

嶋津瑞恵 (しまづ・みずえ)

香奈(5歳)、有紗(4歳) 専業主婦



6年前には全日空の客室乗務員だったのですが、一生続けることのできる仕事をやりたいと考えて、在職中に保育士の資格を取りました。退職後結婚をして、保育室に勤務していましたが、子どもが2人できたので、現在は休職中です。子育て中、自宅で翻訳の仕事ができればと思い、勉強のためにCRNの英語版にアクセスしました。子どもたちが幼稚園に行っている午前中は、CRN三昧です。英語版で楽しみにしているのは、アドバイザー・ボード・メンバーの研究レポートです。過去のを次々と読んだのですが、専門用語ひとつでも「こういう言い方するんだ」と教えられることが多く、大変参考になりました。

今はそうでもないですが、子どもが小さい頃は夜泣きに苦しめられたりして、子育てをしている孤独感にさいなまれることもありました。早く仕事に復帰したいと思っても、ままならないので、正直あせりも感じています。ですから、同じような子どもをもつ母親たちがどんな意識で子育てしているのかというアンケート調査には、とても関心があります。モノグラフのデータなどを見て、悩んでいるのは自分だけではないのだと、安心したりしました。「他の子どもに優しくできない」とか、「おねしょが治らない」とか、ささやかな悩みが載っていると、ほっとします。

CRNで小さい子どもが参加できるようなワークショップがあったら、ぜひ参加しますので、そのような活動も継続していただければうれしいです。また、アドバイザー・ボード・メンバーのコーナーは、ぜひ内容の更新をお願いいたします。

Mizue Shimazu

Homemaker

CRN's English website is a valuable translation resource

Until six years ago, I was a flight attendant, but while I was working, I became certified as a day care center teacher because I wanted a life-long vocation. After quitting my job, I got married and worked as a teacher, but I am currently at home taking care of my two children. Thinking that I could become a translator while raising my children at home, I first accessed the CRN English website as a way to learn translation skills. While my children are in daycare, I spend time studying English on CRN's website. I really enjoy the research reports submitted by Advisory Board Members. It is a very valuable resource because as I read the reports, I make note of technical terms and useful phrases.

I worried when my children cried at night, and now I remember how isolated I sometimes felt taking care of them. To tell the truth, I feel that I would like to make up for the time that I haven't been working but it is just not possible for me to go back to work right now. This is why I am interested in surveys on how other mothers feel about childrearing. I feel a sense of relief when I find that other mothers voice their problems, too.

If CRN ever holds workshops for small children, I would love to participate. I look forward to CRN's future activities and hope that you will continue to update the Advisory Board Member section with interesting articles.



子ども学研究

中国語圏への広がり

「子ども学」の裾野を世界に広げていくために、二〇〇四年度は世界で最も母語人口が多い中国語による「子ども学」の発信を始めることにしました。「子ども学」の中国語名は「児童科学」です。

中国で「子ども学」を プレゼンテーション

十一月上旬に小林CRN所長とCRNスタッフが北京・上海の子どもの研究機関を訪問しました。訪問先は、首都児科研究所所付属病院、中央教育科学研究所、北京大学認知科学研究センターなど、中国の小児医療、教育、脳科学の中心的な機関です。

中国で「子ども学」は受け入れられるのだろうか。事前には期待と不安が半々でした。しかし、「子ども学」のプレゼンテーションを聞いた研究者の反応は上々で、「中国でも増えているさまざまな子どもをめぐる問題に対処するために、『子ども学』的な発想は有効である。ぜひ『子ども学』をもっと勉強したい」という声が多く

聞かれました。

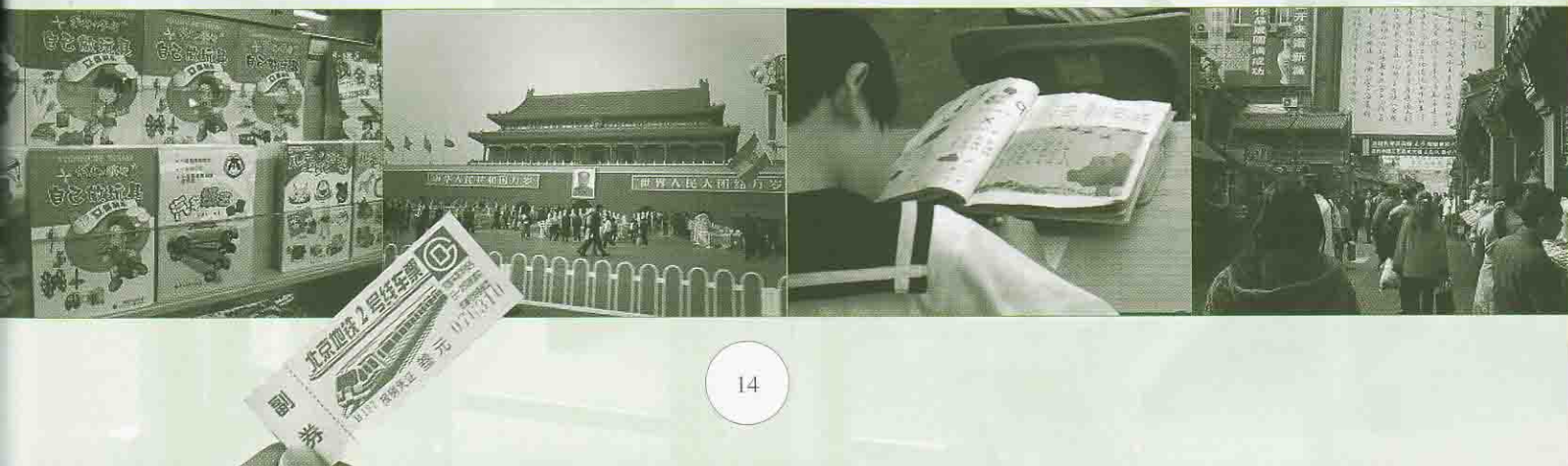
中国で「一人っ子」政策が実行されてはや二十数年。「一人っ子」は「小皇帝」と揶揄されるように、親や祖父母による甘やかしや過保護が子どもにも与える影響が心配されています。たった一人の跡継ぎにかける期待が大きい一方で、子どもの英才教育に過剰に取り組む親も多く、子どもにとっては大きなプレッシャーとなっています。

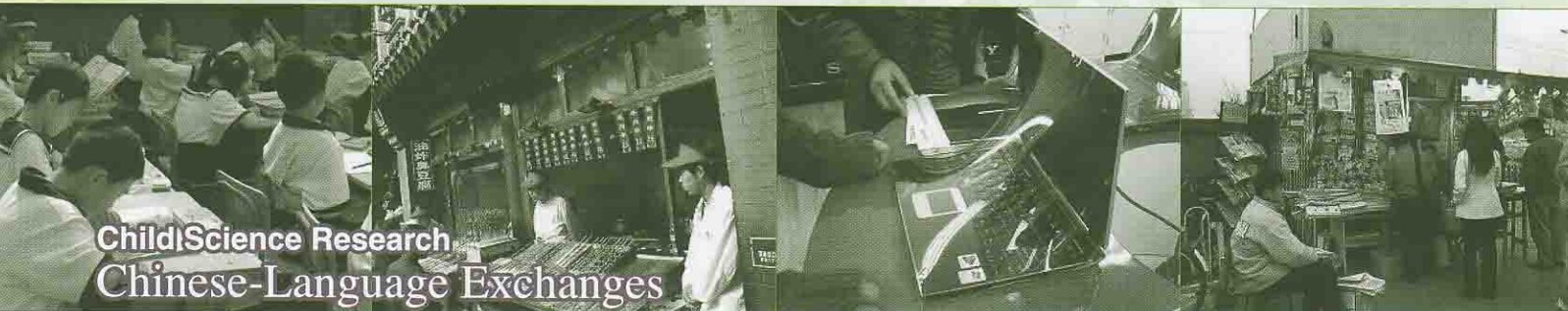
どの国の親も子どもを大切に思う気持ちに違いはありません。しかし、子どもの発達のプロセスを無視して、大人の理想を押し付けるだけの教育は、ときに取り返しのつかないゆがみを子どもたちに与えています。英才教育に対する議論は日本同様に中国でも活発に行われています。普遍性の高

い「子ども学」は、多くの国の人々とその成果を共有することが可能です。二十一世紀を担う子どもの未来のために、「子ども学」が問題解決の一助となる可能性を強く感じました。

「インターネット上の 研究所」の可能性

中国でもインターネットは都市部を中心に急速に普及しており、八七〇〇万人がインターネットを利用しています(二〇〇四年六月末CNNIC調べ)。CRNでは、十一月の研究機関訪問の合間をぬって、約十五名の中国人学生・会社員のインターネットライフをインタビュー調査しました。彼らにとってインターネットは、テレビ・新聞よりも身近な存在で、恋人探し





Child Science Research Chinese-Language Exchanges

In 2004, CRN launched its Chinese-language website to communicate with Chinese-language speakers all over the world and engage in exchanges that will enrich our understanding of Child Science.

Child Science Presentation in China

In early November 2004, Dr. Kobayashi, CRN Director, and CRN staff visited major research institutes in Beijing and Shanghai in the field of pediatrics, education, and neurology where we gave a presentation on Kodomogaku (Child Science). The response was favorable and a number of researchers expressed interest in learning more about Child Science and applying its ideas to deal with the increasing problems involving children in China today.

For example, now in effect for twenty years, the One-Child Policy is causing concern about the effect of indulgent and over-protective parents and grandparents on children. These only-children are subject to tremendous pressure under the high expectations of parents who try to give them an ultra-elitist education. Parents all over the world want the best for their children, but an education that ignores the developmental process to force children to conform to the unrealistic expectations of adults will only create irreversible harm. As the debate about elitist education continues in Japan and China, CRN strongly believes that Child Science offers another way of thinking about children and their future.

The Potential of Cyber Research

Internet use in China is expanding rapidly, mainly in the large cities. According to the survey conducted by the China Internet Network Information Center (CNNIC) at the end of June 2004, there were 87 million users. In interviews with about fifteen students and company workers during our November visit, we found that the Internet was more a part of their daily lives than TV or newspapers, and they even used it to find a romantic partner.

At the same time, it is still rare for individuals and associations to set up their own home pages. Most sites are operated by corporations for commercial and advertising purposes. There are no sites like CRN's that are non-commercial and offer reliable, high-quality information. We hope that the credible, academically backed information on our site will help Chinese parents with child-rearing concerns.

Child Science Network in East Asia

An interest in children's problems and education is growing, not only in Japan and China, but also in South Korea, Taiwan, and Singapore. CRN launched a Chinese-language (Mandarin) website in February 2005 in hopes of building a Child Science network in East Asia, a region with cultural similarities and a number of shared issues. As the first step, we will be promoting exchanges between researchers in Japan and China, so make sure to check out the website!

CRN Chinese-language Website: <http://www.crn.net.cn/>

もできる頼れる存在のようです。寮生活を送る大学生たちは、部屋にテレビはなくてもパソコンは持っていました。街のインターネットカフェでは、チャットや掲示板など思い思いにインターネットを楽しむ若者であふれています。

一方、個人や団体が気軽にホームページを開設する段階にはまだなく、例えば子どもに関するサイトは大手教育機関によるものが主です。CRNのような、営利目的ではない質の高い情報を提供するサイトは希少です。研究者の論考や研究

子育てや教育の問題は、日本、中国に限らず、韓国でも台湾でもシンガポールでも起きています。とくに中国の経済発展や世界経済のグローバル化の波

東アジア圏に「子ども学」のネットワークを

成果にアクセスできる機会は少なく、CRNで学問的な裏づけある情報を得られることは、とくに子育てに悩む中国の親たちには願ってもないことのようにです。

を受けて、「アジアの雄」と言われる五か国は、自国の未来を担う人材育成に必死であり、その影響はストレートに子どもたちへと向かっています。CRNでは、中国語版開設をきっかけに、文化的に共通項が多く、同じような課題を抱えるこれらの東アジア圏の国々と「子ども学」のネットワークをつくりたいと考えています。まずは、第一歩として日本と中国の子ども研究者の交流を支援する活動に着手する予定です。ので、CRN中国語版の今後にぜひともご期待ください。

CRN 中国語版

...URL...

<http://www.crn.net.cn/>

...開設...

2005年2月

...言語...

中国語(簡体字)



現代の子どもたちは、ネットを空気のような存在だと思いながら自己形成を行っています。メディアの是非を問う前に、まず、そのような子どもたちのメディアとの付き合い方を知る必要があるのではないのでしょうか。CRN「子どもとメディア研究室」では、子どもたちの現実を出発点にしてフィールドワークを続けています。

子どもとメディア研究

子どもの現場をフィールドワークする

Research on Children and the Media Fieldwork on Media Use

For children today, the Internet is like the air they breathe. It has become such a part of their lives and the environment in which they develop that they take it for granted. Before making any critical judgments, CRN believes it is necessary to find out how children actually use the media in their daily lives.

携帯メールで二重の開放感を 味わう子どもたち

大人もメールを日常的に使っていますが、デスクトップパソコンでメールを始めた大人と、モバイルの携帯でメールを始めた子どもでは、メールに対する感覚に違いがあります。大人にとってメールは手紙の延長線上にあります。子どもにとってはおしゃべりの延長線上です。大人のメールは用件を伝えるためのもので、文章が長く、形式が重んじられ、すぐに返事をする必要はありません。一方、子どものメールは、たわいない内容で、タイトルもなく、文章は短く、すぐに返事をするのが当たり前です。

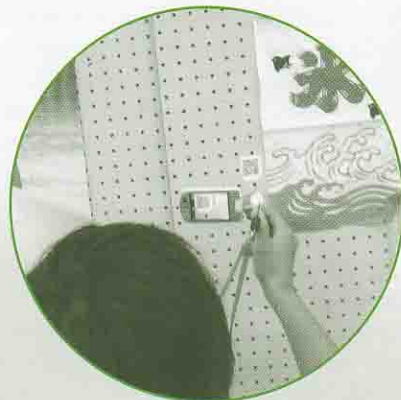
大人はそれまで使っていたメディアや生活スタイルの制約を受けますが、子どもたちは白紙の状態からスタートしていますから、ネットをどう使うと便利なのか、どう使えばおもしろいのかだけを純粋に追求します。ですから、ネット社会への適応力は子どもの方がはるかに勝っています。携帯メールは大人の公的な世界を超えるほどの広がりをもっているが、やり取りは私的な感覚でかまわないという、二重性をもっています。この二重の開放感が、子どもたちに携帯文化をフィットさせるのです。そういう彼らの感覚を理解した上で、将来のメディア環境がどうなっていくのかを考えていきたいと思います。

ポケベルの“友達100人感覚” が続いている

携帯文化をつくったのは誰か、皆さんは覚えておられるでしょうか。もともとビジネスマンの営業ツールとして売り出されたポケベルを、コミュニケーション・ツールとして活用したのは女子高生たちでした。彼女たちの数字の語呂合わせによる創意工夫がなければ、いまの携帯文化はなかったと言っていいかもしれません。

ポケベルやプリクラが盛んになった当時、「友達が100人いる」という女子高生たちの話を聞いて、多くの大人たちは違和感を覚えましたが、携帯メールが普及した現在では、若者たちの誰もがそのような感覚をもつようになりました。多くの人間といつでもつながっているコミュニケーション環境が、どのような精神をつくりあげるのか、そのことに興味をもってCRNでは調査研究を進めてきました。子どもを対象としたのは、大人になってからではなく、物心ついたときからそのような環境にあった子どもの方が、違いが如実にわかると考えたからです。

今の子どもたちにとっては、リアルな人とのつながりとメディアを介したつながりとは同等で区別がありません。ポケベル当時とはメディア環境は大幅に変わりましたが、「友達が100人いる」という感覚は、現在までずっと続いています。



Building a Social Network with *Keitai* Culture

Pocket pagers were originally marketed to business people in sales, but high school girls began using them to communicate with friends. They created a totally new way of communicating by transposing letters into numbers to send text messages. You could say their creativity has given rise to the *keitai* (mobile communications) culture.

When these pagers and Print Club (photo-sticker machines) first became popular, many girls started writing their pager numbers on the stickers and trading them, building collections of 100 or more "beeper pals." Adults wondered if this meant they really had 100 friends, but young people now widely share this *keitai* culture and sensibility. As *keitai* culture expands its environment, what sort of relationships, intercommunication and mentality will it create?

Children don't make a difference between communicating in person and via media. The communications environment has vastly changed since pagers were first introduced, but students are still creating social networks using the latest media.

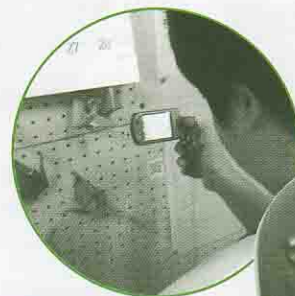
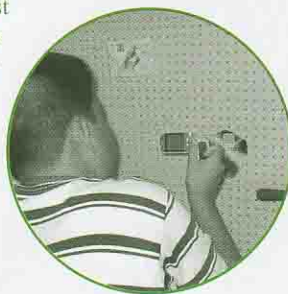
Cellphone Mail

Adults and children have a different relationship to e-mail, mainly because most adults began e-mailing on their PCs while children started on their cellphones. Adults consider e-mail a way to convey a message and they don't expect an immediate reply. Their sentences tend to be long and somewhat formal. Children, on the other hand, e-mail one another for no particular reason and want a response right away. Their messages have short sentences and no titles.

Adults tend to stick to the conventions that have prescribed media use, but children don't start with any preconceived notions. They follow their inclinations to explore the most interesting and convenient way to use new media. This is why children show far greater adaptability to a wireless society. Cellphone use has become so widespread that it transcends the public nature of communication and now allows everyone to enjoy a private intercommunication. This twofold nature of *keitai* culture also provides a feeling of freedom and a key to understanding the future media environment.

Research of Children's Next-Generation Cellphone Use (December 2003-September 2004) ***This research covered how children communicate with third-generation cellphone and use the e-mail, photograph, and moving image functions in their daily lives.

Case Study of Children's Community Sites (July 2004-February 2005) ***The Internet has several sites where children can communicate with one another. This studies how children use the various site functions to keep a diary, write poems, post photographs and maintain relationships with friends.



CRN「子どもとメディア研究室」
<http://www.crn.or.jp/LABO/>
調査研究

(担当：外部研究員 河村智洋、川上真哉)

◆子どもの次世代携帯利用実態調査

(2003年12月～2004年9月)

第三世代携帯電話のメール、写真、動画機能を、子どもたちは日常生活のなかでどう使っているのか？ 小、中、高校生のモニターに携帯電話を貸し出し、数週間後に回収。やりとりのデータを収集し、子どもたちのメディアを介したコミュニケーションを調査研究しました。

◆子どものコミュニティサイト調査

(2004年7月～2005年2月)

インターネット社会のなかに子どもたちが集うコミュニティサイトがあります。このコミュニティサイトの中で、サイトが提供する様々な機能を活用して、日記や詩を書いたり、写真を載せたり、友達づきあいをしている子どもたちを参与観察しています。



日本語サイト 広がりのあるコミュニティへ

「インターネットを活用し、子どもについて調べる・探す・議論する場を提供する」ために、CRNサイトを充実させると同時に、隣接するサイトとの交流に力を入れました。

<http://www.crn.or.jp/>

お勧めコンテンツ

TOPICS

子どもをめぐる最近の話題を取り上げ、関連するデータやレポートを紹介。CRN英語版の紹介や研究者からのホットな話題などもあり。

CRN ABMLレポート・こども未来紀行

国内外の研究者・実践者から寄せられた研究レポート。様々な視点からの子ども研究にふれられます。

子どもデータ検索

『モノグラフ』（ベネッセ未来教育センター刊）には、1万件以上に及ぶ子どもに関する意識・実態調査データがあります。これらのデータをキーワードや調査対象別・調査年度別などの分類で検索できます。

CRNサイトを初めて訪問した人の多くは、検索エンジンで何かの情報を探していて、CRNがヒットしたことがきっかけです。1996年開設以来の定期更新とメンテナンスによって蓄積された豊富で質の高い情報に接し、「知り合いに紹介しました」、「役に立つサイトなのでもっと宣伝して多くの人に知ってもらってください」と感想を寄せる方も少なくありません。

官公庁や研究機関などの公的機関から民間団体、個人の方まで、様々な立場から様々な情報が発信されています。

一方で、子ども問題が複雑かつ多様化するなかで、子どもに携わる人たちが求める情報の範囲は広がり、より新しい情報が求められています。CRNが提供する「研究室」などの6つのメニューには入らない、ユーザーの新たなニーズが出てきています。

そこで、意欲的な取り組みや質の高い情報を提供しているサイトと提携したり、情報発信をしたい団体や個人のサイト運営のお手伝いを積極的に行うことにしました。CRNに掲載される情報に加えて、これらのサイトの情報にもユーザーの方はアクセスできると考えるからです。

例えば、甲南女子大学国際子ども学研究センターは、9月に公式サイトが開設され、1998年以来的研究活動を公開できるようになりました。子どもに関わるニュースを集めたサイト、親子の手作りを応援するサイト、キャラクターの役割を考えるサイトなどの個人運営のサイトは、自由な発想と柔軟さが魅力的です。これからも、CRNが共感するサイトや団体・個人との連携を強めていく予定です。

The screenshot shows the CRN website interface with the following elements:

- Header:** English | サイトマップ | お問い合わせ
- Navigation:** ホーム, イベント情報, リンク集, 運営事務局
- Search:** 検索 | 詳細設定
- Related Sites:** CRNが支援する団体・個人のウェブサイトを紹介
 - 子ども未来センター
 - 日本赤ちゃん学会
 - 甲南女子大学
 - 国際子ども学研究センター
 - JACHRI 子どもの国際ネットワーク
 - 甲南女子大学ティーンズネット
 - Teens Net
 - Child News
 - CRN チャイナ 研究所
- 相互リンクサイト:** 相互リンクサイト募集。詳しくはこちらから。
- わが家:** 世界オンライン教育学会
- 合格英検1級:** 英検1級の精選英文
- 制作りっ!** mom
- キャラクター:** キャラキッズ
- 子どもの虹:** 情報研修センター
- サイバー子ども病院**
- ベネッセ教育総研 ONLINE**
- NAVIGATOR:** ホームページを紹介。検索システムも充実。
- OFFICE:** CRNについて紹介。理念。
- その他:** 利用規約 | プライバシーポリシー | お問い合わせ

Web Community Research (1) Expanding Japanese Website Networks

CRN has expanded its website and links to offer a forum for research and discussion on children.

Most people first encounter CRN through a search engine. Since our website launch in 1996, we have been continually updating content, and because of the wealth of information we offer, many of our first-time visitors have become regular users and gone on to introduce friends or colleagues. Children's issues are growing in complexity, and a number of organizations, both government and private, now issue information on children from various perspectives. We have found that our users have new needs that are not always covered by the six categories in the "Menu" section.

This is why we have established links with the sites of organizations and individuals that offer solid and always stimulating information. We hope that in addition to information on the CRN website, users will also enjoy accessing these sites. One recent addition is the International Center for Child Studies, Konan Women's University that launched its site in September 2004 with research material now available dating back to 1998. CRN will continue to strengthen its links in the coming year.

6 Main Features

Laboratory: Reports of academic societies and conferences, CRN monographs, and other articles for in-depth research on children by theme.

Library: Search for data and research reports on children.

Forum: Discussion of children's issues and topics by theme.

Information: Event information

Navigator (Links): Websites on children and related subjects.

Office: Information on CRN organization and aims, message from the Director and CRN staff.

* Some features of the Laboratory and Forum can only be accessed by registered CRN members.



研究室 Laboratory

テーマごとに子どもに関する
研究を深めていく場です。
研究会の活動報告やレポート
のほか、CRN発刊物も
公開します。



図書館 Library

子どもに関する調査データや
研究レポートを調べたり探したり
する場です。CRNが企画する
シンポジウム、ワークショップ、
講演会などの記録も
閲覧できます。



会議室 Forum

子どもに関する様々な
問題・テーマを議論する
場です。



イベント情報 Information

子どもに関する学会・
イベント・講演会を
紹介する場です。



ナビゲーター (リンク集) Navigator

子どもに関するホームページを
紹介する場です。
「学校マルチ検索」や
「カテゴリ×キーワード検索」は
便利な機能です。

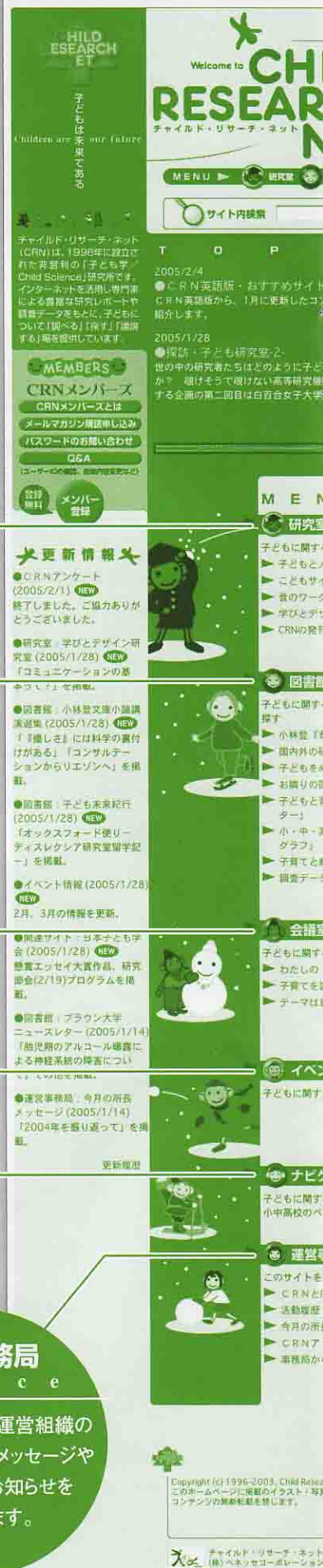


運営事務局 Office

CRN設立理念や運営組織の
ほか、所長からのメッセージや
事務局からのお知らせを
閲覧できます。



*研究室の一部と会議室の利用
にはCRNメンバーズへの登録が
必要です。



中国語サイトの仲間入り

Web Community Research (2) New CRN Chinese-Language Website

育児不安、発達障害、虐待、登校拒否など子どもをめぐる問題の多くは国や地域を超えて共通しています。専門分野や国境を越えて「子ども学」研究に取り組むCRNにとって、言語の壁は大きな課題でした。日本と同じアジアに属し、母語人口世界一の中国語サイトの開設で、新しい知のコラボレーションが生まれることを期待しています。

Child-related issues are common to many countries and regions all over the world: anxiety over child-raising, developmental disorders, abuse, refusal to attend school, truancy and so on. For CRN, where Child Science transcends national boundaries and the borders of existing disciplines, the language barrier has been a big issue. Launching a Chinese-language website now enables greater and wider access, and we look forward to innovative collaborations and exchanges.

M E N U

◆ 児童科学 / Child Science

「子ども学」に関する論考や小林登CRN所長の著書を収録。
Articles on Child Science and articles by Noboru Kobayashi, Director of CRN.

◆ 資料博覧 / Library

子育て・保育・教育に関する読み物を収録。中国人研究者による論考も多い。

Articles on child-rearing, childcare and education, including discussions by Chinese researchers.

◆ 研究課題 / Laboratory

◆ 聊天室 / Forum

◆ 友情リンク / Links

Laboratory (研究室) や Forum (会議室) では、中国で関心の高い子どもに関するテーマを取り上げる予定です。また、多くの子ども研究機関や個人サイトとリンクしていきます。

Laboratory and Forum carry topics on children that have drawn national attention in China. Includes many organizations or private sites related to children.

◆ 关于我们 / Office

CRNの理念、歴史、体制等を紹介。
Introduces CRN

WELCOME TO CHILD RESEARCH NET

日本語 English 网站导览 意见反馈

儿童研究网 (CRN) 是研究儿童问题的国际性研究组织。儿童科学 / Child Science 是一项多学科交叉、融合自然科学和社会科学于一体的新型研究。我们为国际提供讨论和研究的平台。

小林登博士论著
为何提倡“儿童科学”
关注孩子
多样性的生物学基础
人类进化的过程与孩子
信息探索者
生命力：一种自然程序
精神世界亦受程序控制
从生活环境中汲取信息
母子间的亲子交流
孩子们的生活节奏与行...

大家谈“儿童科学”
什么是“儿童科学”？
以进化理论为桥梁

M E N U

资料博覧 LIBRARY
幼儿生活调查数据以及有关育儿、保育和教育的论文
调查资料
布朗大学通讯
儿童研究文献

研究课题 LABORATORY
正在企画中。
(针对社会存在的儿童问题,组织专家进行调查和研究,并定期发布研究报告。)

聊天室 FORUM
自由讨论的场所,围绕保育、育儿、教育问题,各抒己见,集思广益。
育儿专家答疑

友情链接 LINK
征求友情链接,有意者请与我们联系。

关于我们 OFFICE
网上研究所CRN的介绍。
儿童研究网(CRN)简介
活动履历
事务所

中国福利会
中央教育科学研究所
pr school
中国学前教育网
中国教育网
北京学前教育网

请问您使用因特网有多长时间了?
☐ 不到一年。
☐ 1-3年
☐ 3-5年
☐ 5年以上

投票
查看结果
以往结果

推荐网站

Copyright 2004 CRN. All Rights Reserved.
版权所有 CRN (Child Research Net).

本站由日本最大的教育出版株式会社
(Benesse Corporation) 提供全力的支持和运营。



[Japanese version.]

Welcome to **CHILD RESEARCH NET**
A Research Site for the Future of Kids

We are a non-profit organization devoted to thinking with and about young people in Japan.

Feb. 4, 2005

What's NEW

the value of involved
Hilal Weintraub Future University - Hakodate

It's long been an important part of my teaching and learning philosophy and insight, that having students use their bodies and all their senses made learning more real, fun, and engaging. Recently one of my senior students, Ichiro Nishi, told me of an interesting book he read Adap. Kishimoto, A revolution of marriage, Tokubito Shiro, HIR. And you say, 2002. To provide a copy of the book in which the author writes about the importance of having our bodies during the study. It is found in the Archive.

Japanese as a 2nd Language

Children are our future
"Words Are Taken Out - 2" written by Dr. Kikayashi has been posted.

Young Researchers' Forum
"Culturalism" and "Summer Holiday" have been posted.

Education Today
Diagrams of "Mother's Today: Communication among Mothers", "Students and Non-Students: Junior High School Students" and "High School Students and Relationships" have been posted.

If you would like to subscribe to our newsletter from the CRN's newsletters, send feedback, please drop us a note. The next update is February 18, 2005.

Contents ...Our guides will show you around...

Key Issues

- ▶ Study Room on Child Science
- ▶ Education in Japan
- ▶ Playful Learning FY2002 / FY2001 / FY2000
- ▶ Kids and Society
- ▶ Kids and Media
- ▶ Let's Talk! Anything about Children / Children's Issues in Japan / Archive

Cybrary

- ▶ Cybrary Search
- ▶ Education Today in Asia
- ▶ CRN Events
- ▶ Educational Data updated!
- ▶ Archive of CRN Home Page Topics for Discussion updated!
- ▶ Kobu's Kodomogaku updated!
- ▶ Articles by CRN Advisory Board Members
- ▶ Educational Visions
- ▶ Young Researchers' Papers updated!
- ▶ Brown University Child and Adolescent Letter

Researching and Rethinking @ R&R Cafe

- ▶ Teens' Photo Project 2003
- ▶ Dancing Dialog 2004 updated!
- ▶ Rebecca's Education Now
- ▶ Issues of Childhood and Parenthood in Modern Japan
- ▶ Poster Sessions and Dancing Dialogs

Links

- ▶ Editor's Picks
- ▶ Asia Related Links
- ▶ Education Links
- ▶ Educational Foundations
- ▶ Schools in Japan
- ▶ Ministries of Education of the World
- ▶ Organizations
- ▶ Japanese Culture

Who are we @ CRN?

- ▶ Welcome from the Director
- ▶ Objectives
- ▶ Features
- ▶ Advisory Board Members
- ▶ Who's who at CRN
- ▶ A note from our Office
- ▶ Contact Information

Join the CRN Family!

Join the Mailing List!

Tasty Tidbits

Cybrary Search

search
AND/OR SEARCH

Let's Talk!

Anything about Children / Children's Issues in Japan / Archive

Click Here! to receive CRN's Mouse Pad by answering the Questionnaire.

Professionals & Academics!!

We have valuable resources on our site to facilitate your on-going research. Let's make this a place where your research can be shared with others, too!

Young Researchers!!

All Ages! Get involved! Show us what you're doing and thinking and let us help you with your research!

Teachers!!

Get and give hints for your curriculum here. Nothing is more valuable than your experience, so let's talk about how to help each other learn about the world of young people in Japan.

1996年の開設以来、休むことなく毎月更新を続けてきた結果、CRNには質の高い子ども情報が豊富にそろっています。CRNの理念に共感する国内外の研究者やCRNアドバイザリーボードからの研究レポート、シンポジウムや講演会の記録、「子ども学」に関する資料などがあります。CRNはアジアのなかにある日本を拠点とする研究所。英語で読めるアジア諸国の子ども情報はまだまだ少ないため、CRNに多くの期待が寄せられています。

Updated monthly since its inauguration in 1996, CRN's website is a vast source of valuable information. This material on children-related topics consists of symposia and conference papers and reports from researchers in Japan and abroad and from CRN Advisory Board members. As a cyber-research institute based in Japan, CRN also addresses the issues of children in Asia.

お勧めコンテンツ



Tasty Tidbits in FY 2004

◆ Education Today in Asia

Education Today in Asiaは、アジアにおける教育や子どもを研究する研究者にご協力いただき実現した、論文、レポート、ホームページや団体などを紹介するページ。中国、香港、台湾、韓国、シンガポール、マレーシア、インドに関する情報満載です。Introduces academic papers, documents, articles and some website links focusing on education for young children in Asian countries/regions.

◆ Teens' Photo Project 2003

Teens' Photo Project 2003は、調査や研究レポートからは見えてこない子どもたちの姿を写真を通じて伝え、記録することを目的にしています。

Snapshots of teens today—how they live and feel—through the medium of photography.

◆ Issues of Childhood and Parenthood in Modern Japan

Issues of Childhood and Parenthood in Modern Japanは、自身の経験から母親の視点も踏まえて、教育学の専門家が日本の子育て事情を紹介。全8テーマです。

Current childcare and parenting issues from a Japanese mother's point of view and research findings related to each topic.



トピックス

第1回子ども学会議開催 「メディア社会と子どもたち」

研究者とアニメ製作者が語り合える 自由な学会をめざして

日本子ども学会は二〇〇四年九月に、早稲田大学国際会議場で学術集会を開催しました。同学会では毎年開催する学術集会を「子ども学会議」と命名し、学会員だけではなく、幅広く一般の人々にも参加を呼びかけています。子どもの問題を語るためには、大人の教育的な思惑をいったんはずして、子どもの視点で事実を見極めて、それから再び大人の教育的な視点へと返っていく。そんな好循環が生まれることが期待されます。

幼児のメディア視聴について、データをもとに検証

大会のメインテーマは「メディア社会と子どもたち」です。榊原洋一氏（お茶の水女子大学教授）が大会委員長になり、現代の子どもたちの成育環境を考える上で重要な課題のひとつであるメディアについてシンポジウムを行いました。

初日のシンポジウム「徹底討論 幼児のメディア視聴は是か非か？」では、調査データをもとにした討論がなされました。お茶の水女子大学の菅原ますみ氏が、川崎市のゼロ歳児約千二百人の父母を対象に実施した調査結果から、生後七か月余りの乳児も平均で一日四時間近くテレビやビデオに接触しているが、接触時間と心身の発達には関連性は見られなかつ

たという報告を行いました。

一方、国立成育医療センター研究所の谷村雅子氏は、一歳半の幼児がいる約千九百世帯を調査し、毎日四時間以上テレビに接触している子どもは、意味のある言葉を話し出すのが遅れがちで、それは親と一緒に視聴しているとも同じであったことを報告しました。

幼児のメディア視聴の影響については、病的な症例もあり、過度な視聴に対し、警鐘を鳴らす育児関係者が数多くいます。一方で、子どもの発達には多くの要因がからみあっている、因果関係を導き出すのは容易ではないとする声も多くあります。会場からも「テレビ視聴で自閉症になるという説もあるが、科学的根拠はない」「テレビが発達の遅れの原因なのではなく、子育てがうまくいっていない結果として長時間視聴しているのではないか」「視聴するメリットもあるはず」などの声もあがりました。

テレビと子どもの関係をめぐっては、国や放送研究所などで本格的な調査が開始されているので、それらの実証的なデータをもとに慎重な判断をすること、育児支援も含めた幅広い対応が必要なことなどが確認されました。

二日目のシンポジウム「子どもとメディアの未来を考える」では、TVゲームやアニメの製作者を迎え、製作現場からの発言も反映させながら討論を行いました。東映アニメーションのチーフ・プロデューサーである関弘美氏からは、作品作りの現場で、子どもたちの心理や生活環境について細やかな討論がなされていることが紹介されました。アニメやTVゲームに商業主義というレッテルを貼って糾弾するだけでは見えてこない、子どもたちの日常という新たな視点に加えられ、学際的な子ども学会らしい意見交換がなされました。



Stimulating Discussions between Researchers and Media Producers

The Japanese Society of Child Science held its first annual conference in September 2004, which was attended by both Society members and a broad segment of the general public. When discussing children's problems, we need to temporarily put aside our pedagogical concerns and take a good look at the realities of children's daily lives. We need to continually shift between a close-up view and wide-range perspective, zooming in on the situation from the child's point of view and then pulling back to consider what we can do and teach them as adults.

The theme of the two-day conference was "Today's Media Society and Children" which addressed important issues related to children and the media as a formative environment for children today. Professor Yoichi Sakakihara, Ochanomizu Women's University, presided over the conference. The first symposium was entitled "Media Exposure: Good and Bad for Infants?" and researchers presented data demonstrating the adverse effect of extensive TV exposure on infant development. Based on a study of 1200 parents of infants under the age of one, Professor Masumi Sugawara of Ochanomizu Women's University reported that infants over seven months were exposed to an average of nearly four hours of TV and video per day, but there appeared to be no correlation between length of exposure and physical and mental development. On the other hand, Dr. Masako Tanimura, studied 1900 families with children one and a half years of age and found that the children who watched TV for four or more hours a day tended to begin making intelligible utterances much later, and watching with the parents did not affect the result.

Young children's media exposure has also been related to some pathology and quite a few experts warned against excessive exposure. At the same, a number of participants pointed out that child development is a complex process in which causal factors are difficult to identify. It was also noted that no scientific evidence indicates that TV exposure causes autism as sometimes claimed, that TV exposure in itself is not the cause of delayed development, but that lengthy TV exposure may actually result from problems in child-rearing, and that media exposure must surely have merits. The Japanese government and broadcasting research institutes have begun research on children and TV viewing. This indicates the need to make judgments based on verifiable data and to support childrearing with a broad range of measures.

The discussion in the second symposium, "Thinking about the Future of Children and the Media" focused on issues raised by the TV game and media producers present. Ms. Hiromi Seki, Chief Producer at Toei Animation, indicated that they discussed some of the very complicated questions that came up during production regarding child psychology and living environment. Typical of the Japanese Society of Child Science, it was a discussion that provided fresh viewpoints on children that often are obscured when animation and videogames are simply condemned as instruments of commercialism.

第1回 子ども学会議

■会場 早稲田大学国際会議場
■期日 二〇〇四年九月四日・五日
■大会委員長 榎原洋一（お茶の水女子大学教授）
■プログラム
九月四日

○代表講演「子ども学とは何か―育つ育てる―」小林登（日本子ども学会代表・CRN所長）
○特別講演「野生のゴリラと野生の子ども」山極寿一（京都大学大学院理学研究科教授）
○研究報告「子どもの発達と養育環境要因との関連に関する縦断研究」菅原ますみ（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授）
○シンポジウムⅠ「徹底討論 幼児のメディア視聴は是か非か？」

司会 バネリスト 榎原洋一（お茶の水女子大学教授）
菅原ますみ（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授）

バネリスト 谷村雅子（国立成育医療センター研究所 成育社会医学研究部部長）
土谷みち子（東横学園女子短期大学保育学科助教授）

九月五日

○シンポジウムⅡ「子どもとメディアの未来を考える」

司会 沢井佳子（チャイルド・ラボ所長）

バネリスト 岩谷 徹（ナムコ ゲームクリエイター）

関 弘美（東映アニメーション チーフ・プロデューサー）
廣瀬通孝（東京大学先端科学技術研究センター教授）

矢野直明（サイバーリテラシー研究所代表）

教育講演Ⅰ「子どもの安全・安心対策」を根本的に再検討する」清永賢二（日本女子大学人間社会学部教授）
教育講演Ⅱ「子どものための建築環境デザイン」柳澤 要（千葉大学工学部助教授）



CRN活動の軌跡

年月/出来事
Year / Event

- Launched Japanese/English bilingual website (July)
- Symposium, "Children in Today's Multi-Media Society" (July)
- Symposium, "Children's Use of Multi-Media to Make Friends" (March)
- Dr. Jane Goodall visited and talked on "Chimpanzees and Natural Environment" (October)
- Dr. Jay Belsky visited and talked on parenting (October)
- International symposium, "Augmented Childhood" (January)
- Open round-table discussion, "Classroom Disorder and Discipline" (January)
- Held PLAYSHOP 1999, "PLAYFUL" (November)
- Open round-table discussion, "How Do Children Learn Social Aptitude and Rules?" (January)
- Published the pamphlet, "Child Research Net" in Japanese (March)
- Held PLAYSHOP 2000, "Feel the Media" (July)
- International symposium, "The Child Care Paradox: Choices in Children's Development" (July)
- Published booklet on child care and development in Japanese (December)
- Published annual report of FY2000, "CRN YEAR BOOK 2001" (March)
- Opened Nagayama Chi-kichi as a center for research (April)
- Held PLAYSHOP 2001 (June, July, August, December, March)
- Published booklet on Nagayama Chi-kichi in Japanese (November)
- Training seminar for child care providers, "Thinking about the Quality of Day Care" (January)
- Established the Study Session on Child Science (April)
- Launched new CRN Members Site on the Japanese web site (May)
- Published booklet on Child Science in Japanese (March)
- Renewed CRN Website (Japanese) (October)
- Inaugurated the Japanese Society of Child Science (JSCS) (November)
- The first Annual Conference of JSCS (September)
- Visited major children's research institutes in China (November)
- Launched Chinese website (February)
- The first Annual Study Session of JSCS (February)

1996

1997

1998

1999

2000

2001

2002

2003

2004

2005

- 日英二カ国語ウェブサイトオープン (7月)
- シンポジウム「マルチメディア社会の子どもたち」(7月)

- シンポジウム「中高生のデジタルな友達づくり」(3月)
- ジェーン・グドール博士講演会「チンパンジーの世界と自然のお話」(10月)
- ジェイ・ベルスキー博士講演会 (10月)

- 国際シンポジウム「メディアは子どもをどう育てるのか?」(1月)

- 公開座談会「学級崩壊はしついでにといわれるのか?」(1月)
- プレイショップ99「PLAYFUL」(11月)

- 公開座談会「『学校』と『家庭』を結ぶもの」(1月)
- 『チャイルド・リサーチ・ネット』発刊 (3月)
- プレイショップ2000「Feel the Media」(7月)
- 国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」(7月)
- 「子育てのスタイルは発達にどう影響するのか」発刊 (12月)

- 「CRN YEAR BOOK 2001」発刊 (3月)
- 研究拠点「ながやまチーきち」開設 (4月)
- プレイショップ2001 (6、7、8、12、3月)
- 「新しい学びと遊びの実験研究「ながやまチーきち」」発刊 (11月)

- CRN実践保育研修会「保育の質を考える—心とからだを育む視点から」(1月)
- 「子ども学研究会」発足 (4月)
- CRNメンバーサイト開設 (5月)

- 『子ども学研究会Report 2002』発刊 (3月)
- CRNウェブサイト (日本語) リニューアルオープン (10月)
- 「日本子ども学会」設立総会 (11月)

- 「第1回子ども学会」(「日本子ども学会」学術集会) (9月)
- 中国の子ども研究機関を訪問 (11月)

- 中国語ウェブサイトオープン (2月)
- 「第1回子ども学研究会」(「日本子ども学会」研究部会) (2月)



Read archived articles on CRN's website.
<http://www.childresearch.net/CYBRARY/EVENT/index.htm>



CRNウェブサイトで記録を閲覧できます
<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/EVENT/index.html>
 * 発刊物はCRNウェブサイトよりPDFファイルでダウンロードできます。

これからのCRN

Research Plans for FY2005

2005年度の活動予定

CRN will celebrate the tenth anniversary of its founding in FY2005. The past ten years have witnessed the explosion of the Internet and a rapidly changing environment for children. This juncture is an opportunity for us to take stock of these changes in the media and society and reflect on our past achievements. In the coming decade, we plan to establish Child Science as a field of study within the human sciences and to broaden its scope through exchanges and joint research in East Asia. As FY2005 is the first year of our next ten-year plan, we will focus on building frameworks that will introduce and raise an understanding of Child Science.

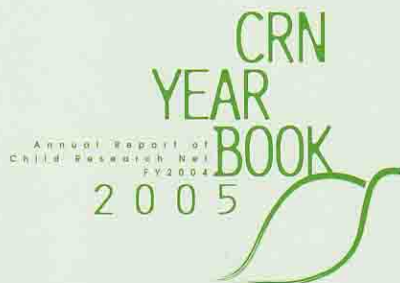
Our Chinese-language website, launched in February, will expand its content to become an ever wider forum and valuable research site with information on children. Information on the Chinese-language website will be posted on both our Japanese- and English-language sites and vice versa. In this way, CRN will continue to add to its depth of knowledge-based resources. In addition to dialogue on the Internet, we find it important to create opportunities for face-to-face discussions between researchers in China and Japan who are working in child-related fields.

CRNは2005年度に設立10周年を迎えます。この10年間に「インターネット」は急速に普及し、「子ども」をめぐる環境も激変することとなりました。CRNでは、そのようなメディアをめぐる社会の変化を踏まえながら、これまでのCRNの過去の活動を振り返りまとめる予定です。次の10年間は、①「子ども学」をヒューマンサイエンスの一分野として位置づけ、学問として確立させること、②東アジア圏に「子ども学」を紹介し、研究交流を行うこと、という二つの課題に取り組みます。

2003年に発足した「日本子ども学会」は着実に歩みを進め、各地の大学に「子ども学」を冠する学部学科も生まれています。昨年11月に訪問した中国では、国が異なっても共通する子ども問題に改めて気づきました。「子ども学」を21世紀の学問として強くアピールする機は熟したといえるでしょう。2005年度はその初年度として、「子ども学」を啓発奨励する仕組みや組織をつくることから着手します。

2月に開設した中国語サイトは、コンテンツの充実と意見交換の場作りを力を入れ、特徴ある子ども研究サイトに育てていきます。中国語サイトから得た情報を日本語・英語サイトで紹介する、あるいはその逆も可能となり、CRNサイトの情報に厚みが出るでしょう。また中国との交流はサイト上だけでなく、実際に日中の子ども研究者が集い、話し合いをする場を持つことも重要だと考えています。





CRN YEAR BOOK 2005

Annual Report of Child Research Net FY 2004 (April, 2004-March, 2005)

発行日/Date

2005年(平成17年)3月31日/March 31, 2005

発行/Publisher

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

〒206-8686 東京都多摩市落合1-34 (株)ベネッセコーポレーション内

電話042-356-0685 ファックス042-356-7306

<http://www.crn.or.jp/>

Child Research Net

c/o Benesse Corporation, 1-34 Ochiai, Tama City, Tokyo 206-8686, Japan

Tel +81-42-356-0685 Fax +81-42-356-7306

<http://www.childresearch.net/>

編集スタッフ/Editing Staff

所 真里子/Mariko Tokoro

劉 愛萍/Aiping Liu

石井 直子/Naoiko Ishii

石橋 貴子/Takako Ishibashi

桜井 玲子/Reiko Sakurai

木下 真(木下編集事務所)/Makoto Kinoshita (KINOSHITA Editorial Office)

英訳/Translation

前堀 信子(トリスコープ・コーポレーション)/Nobuko Maehori (TRISCOPE CORPORATION)

サラ アレン/Sarah Allen

写真提供/Photo Credit

森中 野枝/Noe Morinaka

デザイン・イラスト/Design and Illustration

中村ヒロユキ (Charlie's HOUSE)/Hiroyuki Nakamura (Charlie's HOUSE)

落丁本・乱丁本はお取りかえします

Imperfectly bound and paginated copies will be replaced.

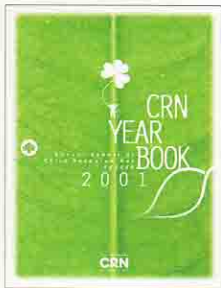
無断転載を禁じます

No part of this publication may be reproduced or transmitted in any form without permission of the publisher.

この冊子は再生紙でできています

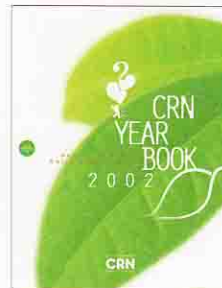
Made from recycled paper

バックナンバー
B a c k N u m b e r



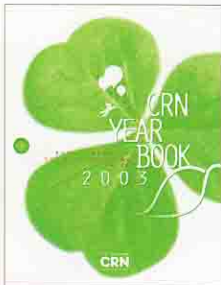
CRN YEAR BOOK 2001
Annual Report of Child Research Net FY 2000

巻頭対談: 澤口俊之×小林登
「最新の脳科学は、子ども観をどう変えるのか?」
A Dialog between Toshiyuki Sawaguchi
and Noboru Kobayashi
"How are Developments in Neurology Changing
our View of Children?"



CRN YEAR BOOK 2002
Annual Report of Child Research Net FY 2001

巻頭座談会: 麻生武×斎藤孝×小林登
「子どもは『心と体』で遊ぶ」
A Dialog between Takeshi Asao, Takashi Saito,
and Noboru Kobayashi
"Children Play with their Minds and Bodies"



CRN YEAR BOOK 2003
Annual Report of Child Research Net FY 2002

巻頭対談: 田近伸和×小林登
「未来のアトムは子どもを超えるのか?」
A Dialog between Nobukazu Tajika
and Noboru Kobayashi
"Can the Future Astroboy Surpass
the Human Child?"



CRN YEAR BOOK 2004
Annual Report of Child Research Net FY 2003

巻頭対談: 持田澄子×小林登
「シナプスの微量物質が心と体のバランスを支配する」
A Dialog between Sumiko Mochida
and Noboru Kobayashi
"Neurotransmitters: Microscopic substances at
the synapse controls the balance between mind and body"

(バックナンバーはこちらから注文できます。)
<http://www.crn.or.jp/LABO/PUBLISH/>



サイバー子ども学研究所

CRN

チャイルド・リサーチ・ネット

日本語版
Japanese-language website

<http://www.crn.or.jp/>

英語版
English-language website

<http://www.childresearch.net/>

中国語版
Chinese-language website

<http://www.crn.net.cn/>

チャイルド・リサーチ・ネットはベネッセコーポレーションの支援のもと、
福武教育振興財団の事業の一環として運営されております。

Child Research Net (CRN) is a non-profit, Internet-based child research
institute and operated as an activity of the Fukutake Education Foundation
under the auspices of Benesse Corporation in Japan.

